The Cambridge Gazette (V. 3)

Personal Letter to Mr. Sato (尊敬する佐藤泰男氏にお送りする私的通信文)

『ケンブリッジ・ガゼット (V. 3): 長目飛耳樹明編』
第 26 号 (2010 年 10 月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

一に曰く、長目(チョウモク: 遠方のモノを見通すこと)、二に曰く、飛耳(ヒジ: 遠方の事柄を聞き取ること)、
三に曰く、樹明(ジュメイ: 明察力を具えていること) 『管子』より (松陰先生の『飛耳長目』を倣って…)

今月号の目次

1. 新年度を迎えたハーバードより
2. 情報解説
3. 編集後記

1. 新年度を迎えたハーバードより

新年度が本格的に始まった秋のハーバードより佐藤泰男氏にケンブリッジ情報を謹んでご報告する。時間は遡って夏休み期間中、本校の元フェローで神戸学院大学の中村亨教授が Ash Center に滞在され、博学の中村先生からは経済学だけでなく文学や哲学についても学ぶことが出来た。先生のご令嬢もマサチューセッツ州 Andover に在る名門高校 Phillips Academy (PA)に夏季留学されていたが、PA は偉大な教育者、新島襄先生の母校だ—1864 年、この 21 歳の上州安中藩士は、函館に居たロシア人をはじめ搭乗した米国商船の船長・船主の厚意により国禁を犯したものの無事出国し、無一文ではあったが PA で学ぶことが出来た。国禁を犯しても米国に学ぶという新島先生の高い「志」は、我等の松陰先生と同じだ。ただ松陰先生は米国の公式使節、ペリー提督に頼んだことが不幸・不運だった。そして今、筆者は松陰先生の言葉を呟いている—「空しく歳月を過して、全く無知蒙昧なるものに候。… 欧米の習慣知識を聞知し、五大洲を周遊せんと欲する志を起し候へども、わが國の航海の禁止は如何ともする能はず。… 今幸に貴國軍艦の來てわが海上に碇泊するに會し、かつ貴國將校の他に對する親切同情の深きを知り … 秘密に貴國軍艦に搭乗し、海を航して、五大洲を旅行することに候。… 國法を犯すものに候へども、敢て決行致さんと存じ候」、と。

2. 情報解説

冒頭に記した通り、中村教授から様々なことを学んだ。即ち①ケネス・ロゴフ教授による昨年の本学新入生講座("Dealing with the Global Financial Crisis")をはじめ、MIT の②リカルド・カバレロ教授の論文("Crisis and Reform: Managing Systemic Risk," Mar.等)や③今年のジョン・ベイツ・クラーク賞受賞者、エステル・デュフロ教授の業績に関して先生と 2 人で語り合った。また④トルストイの小作品『家庭の幸福(*Семейное счастие*)』の中の言葉(人生には唯一確かな幸福がある—それは人のために生きることだ(В жизни есть только одно несомненное счастье—жить для другого.))や⑤デュマの大作『モンテ・クリスト伯(*Le Comte de Monte-Cristo*)』のあらすじも教えて頂き感激すると同時に④と⑤いずれもネット上で原語版と英語版を読むことが出来、情報技術(IT)の偉大さを実感している。とは言え、IT が進展しても(a)中村教授という優れた「ヒト」が教えてくれなければ、また(b)自らに外国語の知識がなければ、IT の恩恵を受けることが出来ないことを痛感し、(i)技術進歩、(ii)優れた「ヒト」という指導者、そして(iii)自らの努力という三者が一体となることこそ枢要と悟った次第だ。また中村先生の御蔭で仏露の文豪の作品が読めたこと自体は喜びだったものの、筆者の夏の読書計画が計らずも遅れてしまった(勿論、先生に責任があるはずはなく同時に筆者の人生から考えれば単なる「誤差の範囲内」でしかないが…)。従って 6 月末に一時帰国を終えボストンに戻った時、精読のために携えていた本(中国古典の『貞観政要』)は未読了のままである。また経済学を学んだ人なら必ずお世話になった「不動点定理」で有名な角谷静夫先生のご令嬢、

角谷美智子女史が *New York Times* 紙の 6 月 28 日付書評で触れられたディヴィッド・ミッチェル氏による長崎出島を舞台とした歴史小説 (*The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*, Random House, Jun.)も未読了である。

前号同様、友人達と様々な論点に関して意見交換をしたことを簡単に記す。即ち①8 月 5 日、ニューヨークに在るロバート・デュジャリック氏の邸宅で開催された寿司パーティーに参加し、筆者が講演を行ったこと、②翌 6 日にケンブリッジの辻優ボストン総領事公邸で開催されたレセプションに参加したこと、③8 月下旬にサンフランシスコとワシントンに飛び、多くの友人と意見交換を行ったこと、④9 月 4 日に成田に戻り、15 日に再び米国へと飛び立ったこと、以上 4 点を記す。

①本学出身でテンプル大学日本校現代アジア研究所(ICAS)所長のデュジャリック氏から、小誌 4 月号で触れた小論文—JETRO New York 所長(当時)の伊藤元氏と筆者による"A Discourse on the New *Kai'entai*: A Scenario for a Revitalized Japan"—を基にした講演依頼を頂いた。「日本からの情報発信」を重視する筆者は、非才であっても積極的に受けるべきと思い講演した次第だ。前号で触れた米日財団のジョージ・パッカード理事長から事前に「ジュン、休暇中で出席出来ない」と電子メールを頂いていたので参加者数に期待していなかった。が、テンプル大学やコロンビア大学の研究者をはじめ多くの人々が参加して下さり、講演及び談話は 7 時半から 11 時過ぎまで続いた(多くの人が参加した理由は筆者の話ではなく、デュジャリック氏が用意した美味しいお寿司だったが…)。会場には本学ビジネス・スクール(HBS)の友人が来ており、御蔭で(?)秋から HBS で彼の授業に特別講師として参加することになってしまった。また多くの日本専門家(Japanologists)も来ており、講演内容を超えて鋭く且つ詳細な質問が筆者に向けられ、高い知的満足度を得られた次第だ。主な質問を紹介すると次の 2 つだ—(a)民主党政権になっても政治の混乱は変わらず、日本の民主主義は機能不全ではないのか? (b)日本は「国際化」・「グローバル化」を戦後一貫して唱えていながら、一向に世界との協調性を深化させないがこれをどう考えるか? これに対して筆者は、(a)リーダーシップを発揮して統治能力を示せない政治家は、民主党であれ自民党であれ、国民から厳しい審判を受けている。従って米国と同じく不完全ではあるが、日本的民主主義はそれなりに機能している。だから問題は米国同様、資質の高い政治家を如何に育てるのか、その制度的改善だと答えた。また(b)日本は、シンガポールや韓国のように国内市場に依存出来ない小国でもなく、同時にグローバル化の大波を受けても影響が小さい米国型の大国でもない(筆者はこの状態を、JJ 即ち Japan as a Jupiter—木星は惑星として最大であっても恒星として自ら光と熱を発することは出来ない—と呼んでいる)。従って一見中途半端に映る日本の「グローバル化」に関して苛立つ人々が多いと述べた。本学では筆者は米欧や中国の情報収集に忙殺され、日本専門家との交流は希薄だ。従ってこの日、日本専門家の鋭い意見を新鮮な気分で聴くことが出来た。或る Japanologist は日本の研究者を次のように分類してくれた—(1)対外発信に積極的な polyglot の日本人、(2) monoglot ではあるが一流の専門性を背景に外国人との交流を巧みに行う人、(3)外国語を理解した「ふり」をしている人、(4)外国語を理解したと「錯覚」している人、(5)外国語の情報に殆んど関心を示さず、free essays のような書き物に終始している人。これを聴いて、「流石は優れた日本専門家だ」と思った次第だ。即ち(1)や(2)のタイプは少数派で、外国人を戸惑わせる(3)のタイプと外国人に「宇宙人との対話」を体験させる(4)のタイプが自称「国際派」と称する日本人の主流を占める。特に厄介なのは(4)のタイプで、東京大学の斎藤兆史教授の著書『英語達人列伝』の中の一節を思い出していた—「基礎的な英語力を持たない人が専門性の高い分野で英語に接するようになると、とかく自分が普段接しているものが正し

い英語だと思い込む傾向にあるようだ。そういう人が英語圏で生活したりすると、(単に特定の生活環境や研究領域についての共通の知識に助けられて)話が通じたという達成感が大きいあまり、日本の英語教師が間違った英語を教えていると決めつけたりする」、と。また(5)のタイプは外国語情報とは関係なく想像力を大胆に働かせて論文を書く人々であり、この結果、良かれ悪しかれ(昨年 12 月号で触れた)「ガラパゴス現象」を生み出すと考えた次第である。また別の日本専門家は次のように述べた—「栗原さん、貴方の仰る通り日本が誇るべきモノは(i)ハイテク製品や(ii)寿司等の食べ物、そして(iii)正確に運行されている鉄道です。従って(iv)日本の工場現場の指導者や技術者、(v)寿司職人等の料理人、そして(vi)運行に携わる鉄道関係者が、外国人でも素晴らしいことが容易に理解出来る。でも大多数の日本のホワイトカラーや非製造業の人には、我々から観るとあまり好い印象を抱かない。私は間違っているでしょうか?」、と。筆者はこの鋭い問いに考え込んでしまった。

②翌朝ケンブリッジに戻り、夕刻、在ボストン日本総領事公邸に向かった。辻優総領事は本学で Ash Center のアンソニー・セイチ所長やジュリアン・チャン氏をはじめ多くの人々と積極的に意見交換をされる聡明な外交官だ。当日は 7 月号で触れたボストン大学のウィリアム・グライムズ教授をはじめ、元海将の香田洋二ご夫妻とも会話を楽しんだ。奥様のお父上が海軍兵学校(海兵)76 期とうかがい、筆者の父親の兄弟 4 人も 68 期から 75 期までの海兵出身だった関係で、海軍を巡る話—(a)戦前の日米の建艦競争と(b)現在の南シナ海での米中対立等—で盛り上がった。そして対米強硬派(「艦隊派」)である加藤寛治提督の話等、香田氏から多くを学ぶことが出来、特に軍人として「慎重」・「協調」という態度を採る時、往々にして「臆病」・「卑怯」として非難される危険性について深く考えた次第である。またその時筆者は『孫子』の中で勇気ある退却の重要性を説いた一節を思い出していた—「退いて罪を避けず、唯だ民を是れ保して、而して利の主に合うは、国の宝なり」、と。いずれにせよ、軍人に限らず身の処し方は難しい。因みに 1812 年、ナポレオンのロシア侵攻時、ロシア軍総司令官のバルクライ将軍は、撤退しつつ一見「軟弱」に映る焦土作戦を採った。しかし多くの部下はこの作戦の意義が理解出来ず、それが故に露皇帝は将軍を更迭せざるを得なかった。その結果、トルストイの『戦争と平和(*Война и мир*)』の中に記されている通り、クトゥーゾフ将軍が指揮を(後には焦土作戦をも)継承することとなった。現在も中国、そして日本でも対外政策に関して相手国との相対的な力関係や動態的な長期的戦略を理解せず、「肉を切らせて骨を絶つ」が如き一時的な後退を「軟弱外交」と叫ぶ人々が少なくない。小誌前号の最後で触れた外交官の加瀬俊一氏は、そうした人々の行為を「時勢を解さぬ無知の暴行であっても、愛国の至情に促された行動」と記したが、今でもこうした動きに警戒しなくてはならない。

③8 月下旬、カリフォルニアとワシントンに飛んだ。西海岸では(a) カリフォルニア大学バークレー校のスティーヴン・ヴォーゲル教授邸で、将来を見通すことの難しい日本政治を語り合い、(b)クリスティーナ・ローマー教授の大統領経済諮問委員会(CEA)委員長在任中、同教授の大学での授業を代わりに担当したブラッドフォード・ドゥロング教授の苦労を友人達と共に本気で心配していた。また(c)ドゥロング教授と共に本を著したスティーヴン・コーエン教授からは、昨年 10 月号で触れた本(*The End of Influence: What Happens When Other Countries Have the Money*, Basic Books, Jan.)が中国語に翻訳される過程(特に知的財産権(IPR)に関する契約)を興味深くうかがい、そして(d)友人のヴェンチャー・キャピタリストとパロアルトに在る素敵なレストラン「California Café」で、日本とカリフォルニア州の財政赤字の惨状を語り合った。また東海岸では(e)日本の財政赤字に関して優れた論文を著された国際通貨基金(IMF)の若き

エコノミスト、徳岡喜一氏と4月に続き再度面談することが出来た。同氏の"The Outlook for Financing Japan's Public Debt," (IMF Working Paper No. 10/19, Jan.)は4月8日付 *The Economist* 誌でも言及されたが、筆者も一国民としてこの問題を看過する訳にいかず、この優れたエコノミストから指導を受けつつ、2人で考えを整理したいと考えている。

④新学期が始まった途端だったが、10日余り一時帰国をした。主目的は高齢になった父親の誕生日を長男として祝うことであったが、滞在11日の夜のうち、9日までも心暖かな友人達と「アルコール消毒(漬け?)」の日々を過ごした次第だ—ラテン語の諺「幸福である間は、汝は多くの友を数えるであろう(donec eris felix, multos numerabis amicos.)」を思い出し、我が身の幸福に深く感謝すると共に、その一部を慧眼な読者に紹介する—(a)筆者が成田に到着した翌日、元空将で双日の永岩俊道氏からは成田出発の前日であったにもかかわらず、7月号で触れた「第33次中国政経懇談会」の様子を詳しくうかがうことが出来た。そして(b)早稲田大学の山本武彦先生を囲んで、Ash Centerの元フェロー、日本銀行の福本智之氏に選んで頂いた素敵な中華料理店で経済産業省(METI)の南部友成氏等と共に楽しい夜を過ごした(残念ながら、永岩氏が米国ご出張のため、また現在航空自衛隊の百里基地司令である荒木淳一空将補がご多忙のために参加出来なかったが…)。会合では山本先生のお弟子さんである中條亮子女史の近著—HBSのリチャード・ヴィートー教授と共に8月に発表された『ハーバードの「世界を動かす授業」』—に彼女自身からサインを頂き大感激だ。また(c)鋭い観察眼を持つ人として尊敬する東京電力の村松衛氏と前田一郎氏、そして佐藤泰男氏と4人でフランス・ワインを口に含む至福のひと時を過ごすことが出来た。その直前に前田氏からメールが届き、小誌で以前触れたマイケル・サンデル本学教授の NHK の TV 番組『ハーバード白熱教室』が人気で「栗原さんはこんなつまみ食い的な放映には反対かも?」との皮肉っぽいジョークを頂いた。いつも筆者を唸らせる鋭い指摘をされる前田氏に対し筆者は微笑みつつ「賛成ですよ!」と思った次第だ—『徒然草』「157段」の「あからさまに聖教の一句を見れば、何となく、前後の文も見ゆ。 … これ則ち、触るる所の益なり」を思い浮かべて「何事もキッカケが大切」だからサンデル教授の授業がキッカケとなり、多くの日本の若者が哲学を英語で語るようになってくれれば…、と願っている(小誌2005年9月号に記したが、筆者が『ニコマコス倫理学(*Ηθικά Νικομάχεια*)』を読んだのも15年前のケンブリッジでの会話がキッカケだ)。そして(d)筆者にとって最大の恩人、イメージプランの田口佳史先生とは、「グローバル戦略リーダー養成講座」という先生の新しい活動につき筆者がどのように参画するかをじっくりとご相談させて頂いた。更には(e)国際社会経済研究所の飾森正氏と日本の将来について、また(f)7月末に METI から企業再生支援機構に移られ、専務執行役員となられた川本明氏と日本企業の再活性化について意見交換をさせて頂いた。(g)6月号で触れた本学主催の国際会議—アジア・ヴィジョン 21(AV21)—で、日本側代表としてご一緒させて頂いた政策研究大学院大学の黒川清教授と日本エネルギー経済研究所の十市勉専務理事からは、お2人がそれぞれ計画中の国際会議のお話をうかがうことが出来た。そしてこのお2人と話をしていると「アッ」という間に時間が経ってしまった。筆者は日本が誇る polyglots である黒川先生や十市氏に続く形で、1人でも多くの若人が世界の人々と双方向の知的情報交換をしてもらいたいと願っている。黒川先生は、シンガポールでの AV21 の時は流暢な英語で、また東京でお目にかかった時は軽妙なテンポの日本語で筆者を魅了させた真に博識な方である。かくして一流の専門家は、分野にかかわらず豊富な知識と語彙で世界の人々と双方向の対話をされている、と感心した次第だ。ところで最近注目された探査機「はやぶさ」は打ち上げ後、目的地を「イトカワ」に変更したが、これは周知の通り糸川英夫博士に因

んだ小惑星だ。筆者は1度だけ糸川先生が生前国際会議で議事進行されるお姿を拝見した経験がある。糸川先生も黒川先生同様、巧みな英語で出席者の発言姿勢を促せていたのを思い出している。さて(h)日本銀行の堀井昭成氏が、筆者の所属するキヤノングローバル戦略研究所(CIGS)の特別顧問に就任され、同氏と久しぶりにゆっくりと話が出来た。黒川先生同様に博学な堀井氏の話も時の経過を忘れさせる。今回は同氏の知人でシカゴ大学のラグラム・ラジャン教授に関する話が印象的だった。少し前に教授の本(*Fault Lines: How Hidden Fractures Still Threaten the World Economy*, Princeton University Press, May)を読了したが、この本の中で教授は日本経済を「瀕死の状態(moribund)」と手厳しく評している。最近も話題となったジャクソンホールにおける会議で、2005年に米国の金融市場の「異変」を指摘したために轟々たる非難を受けたラジャン教授だが、結果的に教授が正しかったことを思えば、彼の日本診断は筆者を不安にさせる。もっとも本学ロー・スクール(HLS)で教鞭を執ったことのあるシンガポール国立大学(NUS)のサイモン・タイ教授は、近著(*Asia Alone: The Dangerous Post-Crisis Divide from America*, Wiley, Jul.)の中で更に厳しい形で日本を評している—"From Japan as Number One, the danger is Japan as zero."と語り、アジアにおける日本の地位を"akin to an ATM"とけんもほろろだ。翻って世界の研究者が一番注目している国は何と言っても中国—特にその政治経済制度の行方—である。これに関し紙面の制約上、書名を列挙するだけに止めるが、①スタンフォード大学に集まったノーベル経済学賞受賞教授等の本(Douglas C. North *et al*, *Violence and Social Orders: A Conceptual Framework for Interpreting Recorded Human History*, Cambridge University Press, 2009)及び、本学とMITの教授による本(Daron Acemoglu and James A. Robinson, *Economic Origins of Dictatorship and Democracy*, Cambridge University Press, 2006)、以上2冊の理論的研究、②優れたジャーナリストの現場報告(Richard McGregor, *The Party: The Secret World of China's Communist Rulers*, Harper, Jun.)、そして③米国海軍大学校の研究者による本(James R. Homes and Toshi Yoshihara, *Chinese Naval Strategy in the 21st Century: The Turn to Mahan*, Routledge, 2007)を比較しつつ再読し、本学の研究者と共に中国の将来を考えている。

3. 編集後記

以上で *Cambridge Gazette* (V. 3)、長目飛耳樹明編第26号を締めくくる。前述したニューヨークでの講演後、デュジャリック氏の邸宅に泊めて頂いた。部屋には安藤広重の浮世絵「亀戸天神境内」や「水道橋駿河台」が飾られ、書棚にはドイツの美術館(Alte Pinakothek)やフランスの「ルーヴル」の書籍が並べられており、専門家ではないが美術の話で講演をして彼の邸宅にもう一泊したい気持ちに駆られた次第である。また近代美術館(MoMA)で開かれていたマチス展に行き、6月に関西に戻った時に訪れた大阪国立国際美術館のルノアール展を思い出していた—大阪の美術館ではお土産をクレジット・カードで購入出来ないので驚き、彼我の違いを痛感させられた!! さて9月30日から2週間余り、パリ、ベルリン、フィレンツェ、ロンドン等の欧州諸都市を巡り、友人達とグラス片手に語り合う秋の夜を楽しむ予定だ。次号ではこの欧州からの世界観を慧眼な読者に伝えることにしたい。

以上

栗原 潤	Jun Felix KURIHARA
ハーバード・ケネディ・スクール シニア・フェロー	Senior Fellow, Harvard Kennedy School (HKS)
キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹	Research Director, Canon Institute for Global Studies

連絡先
Mailing address: 79 JFK St., Ash Center, Cambridge, MA 02138
Office address: 124 Mt. Auburn N235, Cambridge, MA 02138
Tel: +1-617-384-7430; Fax: +1-617-496-4602
Email: Jun_Kurihara@hks.harvard.edu; Kurihara-Jun@rieti.go.jp
(日本での連絡先) 〒100-6511
東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸の内ビルディング 11階
Tel: 03-6213-0550 (代); Fax: 03-3217-1251

過去の *Cambridge Gazette* は全てネット上で見ることが出来、ダウンロードも出来ます。ネット上で「Google グループ」のウェブサイトに行き、そこで"Cambridge Gazette"と打ち込めば、*Cambridge Gazette* が載せてあるサイトに導かれます。